

第 54 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2020 年 3 月 15 日

(題字) 湯池 孝先生



文学・語学による新しい国際交流

日本文学科教授 小松 靖彦



(中澤雄大撮影)

二〇一八年四月から二年間、日本文学科主任を務めるに当たり、国際交流の促進を目標の一つと定めました。

青山学院大学文学部日本文学科は、一九六六年四月に「世界的視野に立つ新しい日本文学（日本文学）研究」を行い、日本文学（日本文学）の海外への紹介と相互の文化交流を推進するために創設されました。当時としては極めて独創的で先進的な理念です。

しかし、この一五年、大学の人文科学分野の学科再編が急激に進み、多くの大学の日本文学科が「国際化」を掲げるようになりました。本学日本文学科も二〇〇五年から五年間、国際シンポジウムなどを開催しましたが、創設当初から「国際化」を理念とする本学科にふさわしい、独自の国際交流をさらに進めたいと思いました。

それを実現したのが、二〇一八年度のタゴール国際大学（インド）、国立リユブリヤーナ大学（スロヴェニア）との交流行事、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA アメリカ合衆国）との国際シンポジウムです。

これらの国際交流の中で私が特に重視したのは、学生・大学院生同士が友人となることです。直接に知り合うことで、メディアの情報だけではわからない互いの社

会・文化が見えてきます。しかし、真に友人になるためには、日本の多くの大学の国際交流にありがちな、それぞれの伝統文化を紹介し合うのでは不十分です。互いに相手の文化に関心を持ちながら、普遍的なテーマを共に考えてゆくと、人種・民族を超えた深い友人関係が作られると思います。

そこで、タゴール国際大学とは「日本とインドの近代化」、リユブリヤーナ大学とは「ことばの身体性」をテーマとする研究発表を、UCLAとのシンポジウムでは、太平洋戦争をめぐる日米双方の詩の朗読を企画しました。

学生の皆さんは想像以上の活躍を見せてくれました。昔話・詩歌の比較研究（「ことばの身体性」の研究）や太平洋戦争をめぐる日米の詩の翻訳のために、自分から進んで事前に綿密な情報交換と発表の準備をしました。研究を深めるための「江戸から東京へ」体験小旅行では会話が弾みました。共同作業の楽しさを学生たちは十分に味わったようです。

行事後、本学科の学生たちは、「インドやスロヴェニアがはるかに具体的に感じられるようになった」

「太平洋戦争を双方向的に考えることに強い興味を覚えた」という感想を寄せています。そして、今でもSNSで互いに連絡を取り合っているそうです。

二〇一九年度には、若手教員が中心となり、九月にはアンカラ大学（トルコ）のアイシエヌール・テキメン教授をお招きして敬語について、三月にはロンドン大学東洋アフリカ研究学院のアンドリュー・ガーストル名譽教授をお招きして役者絵と歌舞伎について、国際シンポジウムを開催しました。今後ますます海外の大学との連繋は広がることでしょう。

こうした文学・語学による新しい形の国際交流が、学生の皆さんにとって、海外の人々との深い相互理解への入り口となることを願っています。



実験！「酒書」のマジック？

日本文学教授 大屋多詠子



大江親兵衛の窮地に、従者のひとり紀二六が餅商人に扮し、館の代わりを書を入れた餅を売って、親兵衛に迫る陰謀を知らせるといふ場面がある。これに対して、親兵衛は餅の代金を紙に包んで渡すのであるが、その包み紙は酒で認められた「酒書」で、それと気付かず、

最近、六歳になった長男は「マジック」や「実験」もどきに興味を持つようになった。「実験！、実験！、種も仕掛けもございません」などと言って、絵の具を混ぜて、たわいなく色水遊びをしたりする。江戸の小説にはこんな「マジック」はなかっただろうか、とふと考えて、子供の頃に遊んだ、あぶり出しを思い出した。

『南総里見八犬伝』第百三十八回の末尾、管領細川政元に従者達との連絡を絶たれた九歳の神童、

たまたま濡れたのを乾かそうとして火に炙った紀二六は、「炙画」のように文字が炙り出されて初めて返書と気付く。本文には「素紙に酒をもて、画まれ文字まれ写ときは、尚素紙にて見えかたかり。其を火に翳炙るに速びて、写たる限り顕る、こは世の人の知る事にて、新奇とするに足らねども、時に取ては遠慮精妙」(岩波文庫)と、「酒書」はよく知られた手法ながら、と神童のこの場の機転を称えている。

紀二六の「餅書」は「鯉書の故

事」(飲馬長城窟行)『文選』(楽府上)に擬えたと本文にある。日本にも、壬申の乱で、大友皇子の妃の十市皇女は、父大海人皇子へ「鮒のつつみやきのありける腹に、小さく文を書きて、おし入れて奉り給へり」(『宇治拾遺物語』一五・一)と鮒の腹中へ書を忍ばせた逸話がある。魚腹の書から、餅中の書に。「餅酒」という狂言もあるように、餅と酒はしばしば対にされて、優劣を論じたりもする。「八犬伝」では、「餅書」に対して「酒書」を出したわけであるが、神童とはいえ、九歳らしい密書でもある。

この「酒書」についてももう少し調べてみると、江戸時代の考証随筆『嬉遊笑覧』三・上には、『物理小識』の、明礬を使った「礬書白字」について引用して「これ、今のおぶり出しといふもの也。あぶり出しは、酒にて書画をかき、火にあぶる。異国の方よりも簡易なり」(岩波文庫)と続ける。明礬のあぶり出しよりも「酒書」が簡単というわけである。時代が下って明治一八年の『改正新版懐中重宝記』(『重宝記』は生活大百科的な書物)には、希硫酸だと炙

り文字は黒く、明礬の溶き汁だと茶褐色ともある。

ということ、子供を遊ばせるという名目で、久しぶりに実験？してみた。とはいえ、明治式は憚られるので、『八犬伝』式の「酒書」と冷蔵庫にあったレモン汁。結果は、レモン汁の方が上手く炙り出せるようである。ただ、手近の印刷用紙で試したので、乾いた後が、炙る前からくつきりと形になって、密書にも「マジック」にもならず仕舞。和紙で試せば、もう少し上手いくのだろうか。気になる方は是非お試しあれ。

第五十四号 目次

- 巻頭随筆 研究余滴
- 日本文学会春季大会
- 二〇一九年日本文学科の活動
- インク下滞在報告
- 研究レポート
- 留学体験記
- 日本文学科留学生の動向
- 卒業生・四年生からのメッセージ
- 夏期集中講義報告
- 研究室探訪
- 院生部会報告
- 今年度の学生の活躍
- 日本文学科関係書籍
- 日本文学科同窓会から
- 二〇一九年度講義題目
- 研究室だより・編集後記

242120201919171613 1211886432

日本文学会春季大会

講演・藤原克己先生（東京大学名誉教授、現・武蔵野大学特任教授）

「喪失の悲しみと詩歌——亡子哀傷篇——」

博士後期課程三年 武居 辰幸



てお話しくださった今回のご講演は、「私達の人生でおよそ、大切なものや人を失うことほど、深い悲しみは他にあるでしょうか」というお言葉から始まった。

二〇一九年六月二二日（土）、青山学院大学日本文学会春季大会が、青山キャンパス一四号館二二階大会議室にて開催された。

菅原道真を中心とした漢文学、『古今集』や『源氏物語』といった平安時代の文学を幅広くご研究されてきた藤原克己氏が、「喪失の悲しみと詩歌——亡子哀傷篇——」と題し、「喪失の悲しみ」を詩歌の言葉がどのように表現してきたのかについて、子に先立たれた折の長歌、漢詩、短歌を取り上げ

家文章』巻二）は、生前、子が遺したものは今ここにあってこその子はおらず、それを見たときに耐えがたい悲しみに襲われたのであること、憶良の「古日を恋ふる歌」と同じく、子が死後の世界を彷徨っているのではないかと思うと、父親として胸が悼むという気持ちで歌おうとしているのではないかと述べられた。

柳原白蓮の歌集『地平線』の中の「悲母——香織・昭和二十年八月十一日戦死」からは、愛息を亡くした当座はぼうっとしていたが、しばらくして冷静になると悲しみが鋭くなる様子を詠んだ短歌を取り上げ、すでに亡くなった愛息の幻影や、自然との触れあいによってあたかも愛息の温もりを感じるかのような、「死」による悲しみがなければ詠めない短歌ならではの表現について説明していただいた。

このように、それぞれの形式によって詠まれた詩歌について、文学でしか表現しえない深い思いがあることを、心をこめて語ってくださった。感動的なご講演に、会場にいらっしやうった方々の涙を拭く姿が見られた。

藤原氏は氏のお父さまが遺した自叙伝のお話をしてくださった。氏がお生まれになるより前に生まれた男の子が、二歳の誕生日を前に亡くなったことを記した一節には、その子が亡くなった当座、毎晩秋の良い月が出て、それを一人悲しくその子が眺めて居ると思うと涙がとめどなく溢れてくる、とあるという。また、そのお父様が亡くなってからしばらくして、お母様が「お父さんが死んだこと、いないこととは違うと思う」と仰ったそうだ。

実際に人の「死」を経験した者であれば、「死」がいなくなることで必ずしも同義ではないと感じたことがあるだろう。「喪失の悲しみ」は、「死」によって生じた悲しみとしてだけでなく、たしかにその人がこの世を生きだ証左として残り続けるのではないだろうか。その悲しみの思いを、遺された者が持ち続ける限り、死してなお心の中で、ときにこれから訪れる日々の中に、死した者は生き続けていくことだろう。

翻訳から見る言語資源の働きの変化

博士前期課程一年 佐々木啓丞

春季大会では、言語資源と役割語の違いについて見解を述べ、言語資源を理解する際に翻訳という面に焦点を当て、そこから言語資源の働き、その時代ごとにおける働きの変化について考察した。

一九五〇年代ごろに見られる翻訳では、黒人、または白人であっても階級が低い場合においては方言があてられるなど言語資源の表すものは上下関係に基づくものであった。しかし、一九八〇年代ごろから当時の日本の時代背景とともに言語資源の働きの変化が見られるようになる。敬語の使用状況を見ると敬語の持つ働きは上下関係のみならず相手との親疎関係の調節という一面も含まれるようになった。また、新聞などのインタビュー記事における女ことばの使用にも親疎関係の調節は見られる。同一人物のインタビューにおける発言を切り取ってみてもほと

んどの言葉が共通語で書かれているのに対し、インタビューの中で女性が伝えたい事に関しては女ことばを使って翻訳がなされていた。そのため言語資源はもともと何らかの上下関係、黒人における差別的な風潮、男尊女卑に基づく社会などのなかでその上下関係を示す働きを持っていたが時代が進むにつれそのような上下関係は見られなくなり、新たな機能として対人関係における距離感、親疎関係を表すものへと変化した。

泉鏡花『菟蕪本』における火の表現

博士前期課程二年 大島 瑞月

二〇一九年六月二二日、青山学院大学日本文学会春季大会において、「鏡花文学における火の表現『菟蕪本』を中心に」と題して研究発表をしました。

『菟蕪本』（大正二・六「ホトトギス」）は、簪に見立てた蠟燭を頭に挿す遊女白露の姿に魅せられた進藤が発狂し、その話を聞いた人たちが次々に発狂してゆく、と

感謝申し上げます。

「大正期日本とタゴール」 — 初期の翻訳者たち、 大正詩壇と自由キリスト教 —

博士前期課程二年 新田 杏奈

去る二〇一九年六月二二日、青山学院大学日本文学会春季大会において「大正期日本とタゴール— 初期の翻訳者たち、大正詩壇と自由キリスト教 —」と題して研究発表を行いました。

ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 一八六一—一九四一) はアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したことで知られるインドの詩人です。日本では大正期において受容が始まり、今日も翻訳が続けられています。

発表では、火の表現から『菟蕪本』が「怪談もの」の側面を持つことがわかりました。今後は鏡花の他の作品の火にも注目し、火が作品に与える影響だけでなく、火の素材やメタファーにも目を向けていこうと考えています。

ご指導してくださった先生方、ご来聴くださった皆様には、心より

本発表では、当時の翻訳者を「大正詩壇」と「自由キリスト教」という二つのグループに分類し、それぞれ「なぜ大正という時代においてタゴールが受容されたのか」という問題について考えました。そして考察の結果、前者には詩壇の

口語自由詩への過渡的試み、後者には第一次世界大戦の影響、また宗教上の親和性など、それぞれ個別の事情が作用していたことが分かりました。

今後は各々の背景を踏まえた上で、具体的な翻訳の問題に入って行きたいと考えています。特に、象徴派詩人系統の「口語訳」と自由キリスト教系統の「文語訳」を取り上げて、両系統の翻訳観の違いなどについても考察を重ねて行きたいです。

本発表は修士論文の構想を基に、その一部を発表させて頂いたものですが、自らの研究を客観視するという上でも、貴重な経験となりました。このような機会を頂いたことに、またご来聴下さった皆様に心より感謝申し上げます。

二〇一九年度日本文学科の活動

国際シンポジウム

「敬語とは何か

——敬語表現の諸相——

日本文学科准教授 澤田 淳

二〇一九年九月二八日(土)に、青山キャンパスにおいて、青山学

院大学日本文学会主催の国際シンポジウム「敬語とは何か——敬語表現の諸相——」が開催された。シンポジウムの内容は下記の通りである。

①趣旨説明、導入：澤田淳(青山学院大学)

②敬語と主語との関係再考：近藤泰弘(青山学院大学)

③古典敬語の特質と未解決問題：小田勝(國學院大學)

④トルコ語の敬語表現：アイシエヌールテキメン(アンカラ大学)

⑤敬語とベネファクティブの近代：滝浦真人(放送大学)

①では、語彙・文法的側面と語用論的・社会的側面からの敬語研究史の概観、および、相對敬語に関する考察がなされた。②では、ダイクシスを補助線として敬語と主語との関係に関する考察がなされた。③では、古典敬語の特質と分類について考察がなされた。④では、トルコ語の類型論的な位置づけ、並びに、トルコ語敬語の特質について考察がなされた。⑤では、ベネファクティブの発達、および、近年の「させていただく」の使用の広がりなどについて考察

がなされた。

いずれもこれまでの敬語研究を乗り越える可能性を実感できる新知見に富んだ内容であった。とりわけ、④のテキメン氏のご発表では、トルコ語においても、尊敬語、謙讓語、丁寧語といった敬語体系が認められる点が示され、敬語体系がアジア地域に集中するという敬語類型論の一般的な見解に対して再考を促す内容のものであった。最後の全体討論では、パネリストの方々とフロアの方々との間で活発な質疑応答や意見交換がなされた。

本シンポジウムには、大学関係者、高校教員、日本語教師、出版関係者、一般の方々など、多様なバックグラウンドを有する方々にご来場頂くことができた。青山学院大学日本文学会では、このようなシンポジウムを継続的に企画していきたいと考えている。本シンポジウムの発表者に、さらに国内の敬語研究者数名を加えた、敬語書籍の出版も予定されている。

二〇一九年度日本文学科の活動

国際シンポジウム

「文学による日米の架け橋——ケネス・レクスロス、翻訳、戦争 Rethinking the Legacy of Kenneth Rexroth」

日本文学科教授 小松 靖彦

二〇一九年三月八日(金)・九日(土)、青山学院大学青山キャンパスで本学日本文学科主催・英米文学科協力による、アメリカの近代詩人で日本文化の深い理解者であったケネス・レクスロスの業績を再評価し、ユニヴァーサル・レスポンスビリティを重視したその精神を継承する国際シンポジウムを開催した。

第一日は一七号館一七五二教室にて、田口哲也氏(同志社大学)の基調講演の後、「レクスロスと翻訳」をテーマに、ジェフリー・アングルス氏(西ミシガン大学)、トレレン・デヴォア氏(長野県立大学)、マイケル・エメリック氏(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)、トークイル・ダシー氏(同)、小松靖彦(本学日本文学科)、山崎藍氏(同)がその翻訳論と日



本・中国の古典詩歌の翻訳の方法を論じ、次いで「レクソロスと戦争」をテーマにジョン・ソルト氏（詩人、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所）、ギブソン松井佳子氏（神田外語大学）、メアリー・ナイトン氏（本学英米文学科）、片山宏行氏（本学日本文学科）、西本あづさ氏（本学英米文学科）が戦争下におけるその芸術・社会活動を明らかにした。コメンテーターとして伊藤比呂美氏（詩人、早稲田大学）と青木映子氏（フリーランス・ライター、翻訳家）が鋭い論評を加えた。その後、七号館七二〇教室に移り、ギブソン聡クリストファー氏のチェロの伴奏でギブソン松井氏がレクソロスの詩と自作の詩を朗読した。

第二日は、一四号館第一八会議



室にて、伊藤比呂美氏が「声の文化としての詩」について語った後、自作を、アングルス氏による英訳の朗読と交響させながら朗読した。続いて、太平洋戦争をめぐる日米双方の詩を、天野早紀さん、狩野祐輝さん、伊藤遥さん、ハ・ゴンウさん、新田杏奈さんから本学日本文学科学生・大学院生と、ケイシー・マーティンさん、ダニカ・トラスコットさん、キム・マクネリーさんからカリフォルニア大学ロサンゼルス校大



学院生が朗読した（なお、それぞれが協力して、英訳・日本語訳を作成して配布）。さらにギブソン氏のチェロの伴奏で、伊藤遥さん、上田咲樹さん（英米文学科）がレクソロスの詩を朗読した。その後、「レクソロス、翻訳、戦争」をテーマとする大学院生シンポジウムが開かれ、トラスコットさん、佐藤織衣さん、マクネリーさん、内村文紀さん、マーティンさん、安藤優一さんが研究発表を行った。

声の持つ力を再発見し、アメリカ文学に旋風を巻き起こしたレクソロス。二日間のシンポジウムを通じて、声の力、さらには身体に根ざした文学のしなやかさと勁さを学んだ。特に日米の学生たちの朗読は清冽な印象を残した。なお、この国際シンポジウム開催に当たり本学文学部から支援を受けた。

学術協定の締結

二〇〇六年度以来、本学日本文学科は海外の大学と、共同研究、教員交換、将来的には大学院生の交換を行うための学術協定を積極的に結んでいる。コロンビア大学東アジア言語文化学部、州立カリ

フォルニア大学ロサンゼルス校アジア言語文化学部、国立リユブリヤーナ大学文学部アジア研究学科、東北師範大学外国語学院日本文学科に加え、この度新たに次のDepartmentと協定を締結した。

ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究学科学科 Department of Asian Studies [二〇一九年四月一日]

カナダにおけるアジア研究の中心的研究・教育機関。日本文学についてはジョシユア・モストウ教授（前近代文学と芸術）とクリスティーナ・ラフィン准教授（古代・中世文学、ジェンダー論）のもと、先端的研究が進められている。佐伯真一教授がアレクセイ・ルスコエンコ氏（ブリティッシュ・コロンビア大学大学院生）の研究指導をしたことを縁に、二〇一八年に佐伯教授とラフィン准教授が交渉を重ね学術協定を締結。

鎌倉市との包括連携協定の締結

『萬葉集』を出典とする新元号が制定されたことを機縁に、鎌倉市共創計画部文化人権課課長石川

「令和」という時代

二B 蛭田 桜

二〇一九年四月一日。同年五月一日の改元に先立ち、新元号の発表が行われた。新たな元号は「令和」。私は新入生歓迎会の準備中に伝聞でこれを知った。リアルタイムでニュースをチェックした方も多いと思う。

多くの人々の注目の中発表された「令和」という元号は、その典拠を万葉集の一節にとる。まずは該当部分をご参照頂きたい。(書き下し・訳ともに『新編日本古典文学全集七 万葉集②』を参照)

万葉集巻五 梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃りて、宴会を申べたり。

時に初春の令月にして、気淑く和らぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾

雅之氏より小松に、『萬葉集』の展示についての協力要請があった。小松は、中世の萬葉学者仙覚が画期的研究を進め、古典研究の拠点であった鎌倉に「鎌倉仙覚文庫」を創設することを提案した。

この文庫を核として、史学科・比較芸術学科の協力を得つつ、日本文学科が青山学院大学側の窓口となつて、文学、歴史、芸術などの学術交流並びに教育研究活動を通じて、地域社会の教育・文化の振興と発展及び人材の育成に寄与することを目的とする包括連携協定を鎌倉市と締結した。十一月九日(火)の鎌倉市役所での締結式には三木義一学長、松尾崇市長らが出席した。

インド滞在報告

日本文学科教授 佐藤 泉

夏休みにあたる八月六日から九月八日までの五週間ほどの期間、インドに滞在し、ビジュババラティ大学をはじめとする大学で授業を行いました。たいへん新鮮で、たいへん楽しい経験となりました。

・八月六日〜九月二日 ビジュバ

バラティ大学言語学部日本文学科

日本近代文学史(学部三年生対象)

一時間×週三回(金・土・火)

日本近代思想史(大学院生対象)

二時間×週三回(土・日・月)

・九月三日 コルカタのオックス

フォードブックストアで、夏目漱

石の思想についてレクチャー

・九月五日 ジャワハルラール・

ネルー大学

講演・沖繩——歴史のおくゆき、

文化のゆらぎ

(国際交流基金ニューデリー日本

文化センター主催「沖繩の風」関

連講演)

・九月六日 デリー大学

オノマトペ、川端康成を翻訳する

にあたっての問題点、宮沢賢治

の「自己犠牲」の思想、日印の仏

教思想の比較、よしもとばなな

現代文学など、関心の幅も多岐に

渡っています。なにより学科長の

ギータ・A・キニ先生の人間性に

あふれた語りかけが学生たちの研

究をしつかりと支え、後押しして

いる様子がうかがわれました。

ビジュババラティは、小学校か

ら大学院までをカバーした大きい

教育機関で、全体が一つの町をな

しています。ある朝早起きして散

歩に出たところ、森の中でおそろ

いのサフラン色の制服をきた子ども

たちが輪になって先生の話をき

いているのに出くわしました。子どもたちの黄色な輪が森のあちこち

ちでできているのです、私は夢を

みているのかと思いました。私た

ちはコンクリートの四角い教室の

中で授業を聞いて育ったのですか

ら。ビジュババラティは、アジアで

はじめてノーベル文学賞を受賞し

た詩人、タゴールによって創設さ

れた有名な大学です。自然と人間

との調和を重んじる思想が、今も

生きているのを目の当たりにして、

忘れたい思い出となりました。

ビジュババラティは、アジアで

はじめてノーベル文学賞を受賞し

た詩人、タゴールによって創設さ

れた有名な大学です。自然と人間

との調和を重んじる思想が、今も

け、夕の岫に霧結び、鳥はうすもの¹に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空には故雁帰る。(以下略)

天平二年正月十三日、太宰帥旅人卿の邸宅に集つて、宴会を開く。

折しも、初春の正月の佳い月で、気は良く風は穏やかである。梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。そればかりではない、夜明けの峰には雲がさしかかり、松はその雲の羅(ベール)をまといつて蓋(きぬがさ)をさしかけたように見え、夕方の山の頂には霧がかかつて、鳥はその霧のうすぎぬ²に封じ込められて林の中に迷っている。庭には今年生まれた蝶が舞つており、空には去年の雁が帰つて行く。(以下略)

「令和」という元号は、書き下し文二行目、「時に初春の令月にして、気淑く和らぐ」の「令」の字と「和」の字を取ってつけられた。

この元号について、安倍晋三首相は「厳しい寒さの後に、春の別れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が、明

日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そうした日本でありたいとの願いを込め、令和に決定した³。」と語つたそう⁴だ。

では、私たちはどのように「それぞれの花を咲かせる」ことができるのだろうか。当然その方法は十人十色、千差万別であろう。私は自分の花を咲かせるために、文学を学ぶことをその一助としたい。

今、世界は情報技術の発達にもなつて急速にグローバル化が進んでいる。来年には、いよいよ東京オリンピックが開催され、今以上に世界中の人々が日本を訪れることとなる。日本の、私たちの将来を語るには、世界の人々との関りを無視することはできない。「令和」の英訳は「beautiful harmony」。我々は、世界中の人々と「harmony」を奏でることのできる、そんな時代に生きている。

しかし、「harmony」を奏でるために、一人一人がしっかりと自己を確立しなければならぬ。合奏や合唱をイメージして欲しい。他人につられてしまつては、美しい「harmony」は生まれぬ。一つ一つの音が正確に奏でられて初めて、

調和のとれたメロディが完成する。

自己を見つめなおし、確立させる。そのために、文学を学ぶこととは大変意義のあることではないかと考える。冒頭で万葉集を引用させていたのだが、それを読んで何を感じただろうか。何を思っただろうか。その感情を見つめることも、アイデンティティの確立に役立つのではと思う。自国の古代の文学を学ぶことは、自らのルーツに向き合うことにもなるだろう。

「令和」は確認されるかぎり初めて、国書を典拠に持つ元号だ。日本が元号のルーツを自国の書物に求めたように、私も自国の文学を通して、自分の存在を探っていきたい。

注

1 本文の漢字を平仮名にあらためた

2 脚注1に同じ

3 『朝日新聞』二〇一九年四月一日夕刊「令和へはいわ」新元号、万葉集が典拠 五月一日施行」より引用



『外からの視点

―チエンバレンと詩歌―

二B 狩野 祐輝

TOKYO。紙の中央に無造作に置かれた五文字に日本中が歓喜した。あれからはや七年。東京五輪の開催が、世界中の人々を東京へと向かわせる。期待を胸に故郷からやって来た人々の目に、東京は、日本は、どのように映るのだろうか。もしそこで人々が日本文学に触れたら、どんな感想を抱くのだろうか。ここでは日本文学を「外からの視点」で分析した過去の研究を通して、日本文学の本質を考えていく。

今回取り上げる「外からの視点」はバジル・ホール・チエンバレンの視点である。彼はイギリスの日本学者である。『古事記』の英訳やアイヌ語、琉球語まで幅広く研究を行った。一八七三年に来日しており、東京帝国大学で教授をつとめた。いかにも親日家な経歴を持つチエンバレン。しかし彼は意外にも日本文学、とりわけ詩歌に対して痛烈な批判を行っていた。

彼の批判を整理し、日本文学、詩歌の本質に迫っていかう。

チェンバレンはラフカディオ・ハーンに宛てた手紙で以下のように述べている。

私は日本の詩歌を最大の熱意を傾けて研究し、自ら試作を試みることでやってみました。そして、『万葉集』に始まるその後時代を追って全ての詩歌を読みましたが、想像力においては、それら全てをあわせても、ワーズワスのソネットのわずか数篇にも満たないという結論に達したのです。日本人の思考の全てがどこか無味乾燥で内容が希薄なのです。

(サー・ヒュー・コータツツイ & ゴードン・ダニエルズ 『英国と日本 架橋の人々』 (一九九八) 思文閣出版)

ここではワーズワスの詩歌と万葉集以降の日本の詩歌を対比し、日本人の想像力をヨーロッパ人より劣つたものとしている。しかしこの比較は本当に適切だろうか。そもそも日本語と英語では詩の構造が違う。短歌など日本の詩はリズムを重視し、定まった字数の中

で簡潔に表現することを重視している。一方で英語の詩は押韻こそあるものの、長さの制約は少ない。英語の詩と比較して短い日本語の詩が、想像力が少なく見えるのは自然なことだ。

また短歌は字数制約上全てを描かず(描けず)、読者には想像の余地が残る。一方で英語の詩になると全てが明示され、想像の余地はない。この余白を「描かぬ美」と捉えるか、想像力の欠落と捉えるか、両者には本質的な差がある。短歌とその英訳を見比べると、この差はより顕著に見て取れる。そして松島正一は『詩と経験―ワーズワスからD.トマスまで―』(二〇〇六)でワーズワスの詩作をこのように分析している。

ある出来事が詩人のなかで「経験」にまで昇化されるには時間の経過が必要である。物語の内部にある真実を見通す眼が養われ、詩人の「内なる眼」がそれを捉えなければ、事柄は詩の題材とはならない。

つまりワーズワスの詩歌は出来事の発生から時間が経過し、経験にまで昇華されることで作られる

ものなのだ。しかし日本では歌をその場で作り発表すること(「詠む」)が重視されていた。例えば、題がその場で発表され、即興で歌を詠む歌合(当座)。前の人が詠んだ歌につなげて即興で歌を作る連歌。確かにその内容は熟考の末に詠まれたものよりは劣るかもしれない。しかし即興性は日本の詩歌の重要な特徴である。

チェンバレンの日本文学批判という「外からの視点」。それにより英語の詩と相対した日本語の詩の特徴―簡潔性と即興性が浮き彫りになった。そして簡潔性は日本人の「描かぬ美」という価値観に裏打ちされている。



戦争の独立から、文学の独立まで ―これからの日本と インドネシアの文学交流―

三B 陳 柏丞

既存のスンダ文学はオラリティー(声の文化)と密接な関係を持つが、オランダ人によって持

ち込まれた西洋的文学観は文字に依存していた。植民地行政によって導入された学校教育と教科書、印刷技術などを背景に、新しい文学が生まれた。言い換えると、極めて植民地的なコンテキストなかで近代文学が創造されていた。興味深いのは、西洋的な文学観が学校教育によって浸透し、それがスンダの近代文学の一つの起源を形成するようになったこと、また近代文学の形成とともに既存の文学伝統においては音読もしくは「朗誦」されるものであった読書形態が「黙読」になったことである。これに伴い、文体も韻文中心から散文へと変化し、二十世紀の初頭にはスンダ語の文学において小説という新しいジャンルが生まれた。社会と文学の関係、あるいは文学は社会の中で書かれるという観点は、スハルト体制下およびその崩壊後の現代インドネシア文学についても有効である。文学は社会のバロメーターとしての役割を担っているとさえ言えるだろう。

こうして、インドネシアにおいて近代文学といった作品が多数生まれ、詩や小説などのジャンル

で面白い作品が多数生み出された。しかし日本人にはほとんど知られていない。

ロウリ・エステルは、インドネシアの高等教育機構の日本学科に属する学生の卒業論文や研究テーマについて分析している。エステルが提示したリストによれば、十数年前は芥川龍之介・川端康成といった有名作家の古典的な作品が選ばれることがほとんどであったが、二〇〇六年以降、これらの主流作家に加えて、新人作家や女性作家の作品も取り上げられ、内容も多様性が見られるようになったことが分かる。

エステルが指摘するこの変化は、インドネシアにおいて日本文壇への理解が進んだ結果であって好ましい反面、日本におけるインドネシア文学研究の進み具合と対照すると、日本側が輸入より輸出のほうが長けているという懸念を示している。と解釈出来るであろう。

Wibawarta は、現在、文学作品以上に日本の漫画が海外で大変な人気を博しており、そうした日本あるいは海外の様々な情報は、インターネットや映画などで簡単

に入手出来るようになったとしながらも、「国際交流の基本はフェース・トゥ・フェースであり、人が向かい合って直接話をすることが肝要である。それゆえに、交換留学生たちを交えた共同研究が重要になってくる」と述べる。また、インドネシアでは日本文学関係の書物の翻訳は三十年以上前から行われているものの、数は多くないこと、それらの本のほとんどが直接日本語から訳されたのではなく、英語から重訳されており、日本語の意味・ニュアンスが変化する可能性が高いと分析している。Wibawarta はさらに「日本文学研究は外国語で発表されるとなると、従来は日本側からあまり高い評価を得られなかった。外国人に日本文学の神髄がわかるか、という風潮は今では大分少なくなったが、そのレベルはまだまだ低いものとして正面に向かい合って評価することを避けてきた傾向がある」とも指摘する。

日本文学研究が外国語で発表される場合、従来日本側からはあまり高い評価を得られなかった。しかしグローバルバリエーションと呼ばれる時代となった今、日本文学研

究が日本語にだけとどまり、世界にそのように認められてしまうことは賢明とは言えない。多言語による理解が進む時代となった以上、幅広い視野から、外国語で発表された日本文学関連の研究成果を収集・整理することも重要な課題であろう。

加えて、日本側は文学の輸入と輸出のバランスをとることが望まれる。ここ十数年の間、インドネシアでは日本文学や日本文学が盛んに研究されてきたものの、自国文学に関する発信は十分ではない。日本のみならず、インドネシアも、バランスをとることに一層の力を注ぐべきではないだろうか。

参考文献

- Bambang WIBAWARTA (二〇一〇)「日本研究の展望—インドネシアをめぐる—」『立命館言語文化研究』二二—三
- ロウリ・エステル(二〇一七)「インドネシアにおける日本文学研究の現状—発展及び将来性」『跨境日本語文学研究』五

留学体験記

和田 莉世

私は、二〇一八年の六月から二〇一九年の二月までの九か月間、ニュージーランドのオークランドへ留学していました。私が使ったビザは、ワーキングホリデービザで、海外生活の経験がない私は、情報収集のために語学学校へ二週間だけ通いました。最初の生活の二週間は、学校の近くのホームステイで生活していました。その後は自分で家を見つけなければいけなかったのですが、日本人がシェアハウスをしている台湾人のオーナーの家で過ごしていました。アルバイト先も日本食レストランで働いていて、語学学校にも通っていませんでした。外国人の友だちができませんでした。初めての海外生活に不安の気持ちから、つい自分に甘い選択をしてしまいました。このままではいけない。」と思い、家を出てバックパッカー形式のホステルに滞在し、仕事も韓国料理屋で働き始めました。

バックパッカーのホステルでは、本当に様々な人がいました。一、二日だけ旅行に来ていた人もいれば、一年以上そこに住んでいる人もいました。人数は多かったです。日本人はいつも三〜五人ほどでした。いつもいくつかのホステルを一、二週間に一回移動していましたが、ホステルごとに、特色も違いました。南アメリカ地域の多い場所や、ヨーロッパの人々の多い場所など様々でした。私はそこで多くの友達を作り、その後の留学生生活の大半をその友人たちと過ごしました。

私が最初に訪れたホステルは、あまりきれいなところではありませんでしたが、夜ご飯が無料で食べられるというところでした。お金を現金八万円と、クレジットカードも持っていないく、お金のなかった私にとって、非常に好条件な場所でした。そして、なによりそこに住む人々は、本当にいい人ばかりでした。私は誕生日が七月なのですが、出会ったばかりにも関わらず、サプライズで誕生日パーティーをしてくれました。私にはあの出来事や、その時の嬉しさを一生忘れないと思います。そこ

で出会った台湾人、イタリア人の女の子や、中国人、韓国人の男の子と、よく一緒にテーブルを囲んでご飯を食べました。その時、お互いの郷土料理などを順番に作ったり、一緒にニュージーランドの特産品などを食べました。

次のホステルは、少し町から遠いですが、すごくきれいな場所です。セキュリティも安全な方でした。私はそこで、一生付き合っている友人を見つけました。そのホステルは、一番上の階に食堂があるので、そこで日本の文化が大好きなノルウェー人の女の子と出会いました。その子はとてもユニークで、サザンオールスターズの『TSUNAMI』が歌えたり、日本のバラエティー番組などを見ていました。すぐに日本の話で意気投合し、一緒に来ていたパートナーの、チリ人の男性とも打ち解けました。一緒にご飯を食べていると、毎回様々な国籍の人が、一緒にご飯を食べようと来るのですが、そこで出会ったイラン人の男性とも馬が合い、そこでの生活が終わった後、四人でマンションの一角を借りて暮らし始めました。四人での暮らしは本当に新鮮の

連続でした。お互い母国語があるので、共通言語は英語で、非常に英語の勉強になりました。しかし、今回のニュージーランド生活で、私が真に学んだのは、多種多様な文化でした。私はここには書ききれないくらい、非常に様々な体験をしました。その一つ一つが、私のこれからの人生や、物の考え方をより一層深めていくのだと思います。

日本文学科 留学生の動向

日本文学科教授 佐伯 眞一

時間を割いています。

また、大学院では、前期課程・後期課程それぞれに二名ずつ、計四名の留学生が在籍している他、来年度には国費留学生四名の受け入れを予定しているなど、留学生が急速に増加しています。

また、学部の留学生には、上級生がチューターとして指導にあたることになっています。二〇一九年度は、ハゴンウ・青野莉奈・岡本千帆・浄野瑠奈・堺恵美の五名がチューターを務めています。教員とチューターは、留学生と共に、年に二回ほど文化交流活動を行っています。例年春には懇親会を開催、また秋にはあちこちの見学に出かけます(二〇一八年度は日帰りで鎌倉に出かけました。写真はその時のものです)。

履修登録の指導から交流活動まで、留学生にとってチューターは常に必要です。興味のある在生は、是非やってみてください。

留学生でもあり、現在チューターでもあるハゴンウさんから、最後に一言。「近年では留学生間での青山学院大学の評価も上がってきて高い日本語力を備えている優秀な学生が日本文学科に集まっ

卒業生・四年生からのメッセージ

「大学院に進学して」

博士前期課程1年 黒崎 匠

ています。国籍としては韓国・中国が多い傾向にあります。チューターになることで日本文学科の留学生をサポートしながら仲良しになることができます。活動頻度は月一、二回ほどで昨年はみんなで鎌倉に行き日本の文化に触れてきました。チューター申請の情報はポータルに告知が行くほか授業中先生からの告知から得ることができ

身の回りの同級生たちのほとんどが就職の道を選ぶ中、私が大学院に進学することを決めたのは、教師になることを志してのことである。院に進学した者がすべて研究職へ進むというのではなく、一般就職や公務員試験などの道を選ぶ者もいるし、私のように就職へ進む者もいる。院への進学は、必ずしもその後の道が決まってしまうようなものではないのである。

大学院という場合は、研究の場である。単に知識を受け取り、その理解を問われるというような場ではない。今までは教えてもらえばよかったものを、今度は自ら生み出し、他者に伝えるべく努力しなければならぬ。私が大学院に進学しようと考えたのは、まさにその空間、環境に魅力を感じてのことなのである。人に知識を教える

者として、自身が学びに集中できる場に身を置き、研究するという経験が必要になると考えたのである。

実際に進学してみると、それまで大学で受けてきた授業や、行ってきた勉強とは全く違っていった。授業は少人数で行われ、お互いに発表し合い、意見を言い合い、常に自分で考えて参加しなければついていけない。勉強を教えてもらうという姿勢では得られるものは少なく、自ら学びに参加する意欲を持ち続ける必要がある。初めはその形式に戸惑いもしたが、知識の交流や意見の交流が密に行われる時間は、一人では気づけなかった事柄や、身につけられなかった見方を発見させてくれる。

そのため、院での学びは決して簡単なことではない。常に学び続けようとしなければならぬし、そうでなければ新たな知識を生み出すこともできない。しかし、それだけ自身の勉強、学習に力を入

れ、集中できる環境というのは他にはないのではないだろうか。生活していく上で、様々なことに気を取られ忙しくしている中で、腰を据えた学びに使える時間はそう取れない。もっと勉強していれば、自分の知識量に自信が持てない、そういった不安や不信を取り払うのが困難になってしまう。私が将来教師になった時、院へ進学したことが自身に繋がり、常に学ぼうという姿勢はより良い教育につながるかと確信している。大学院で過ごす時間は、苦しくも贅沢な時間である。さらなる知識を身につけ、自己研鑽を積むのに、大学院というのはまさに適した場であると言える。

「就職活動体験記(一般企業)」

石井 美帆

わたしは就職活動を大学三年生の夏から始めました。当初、就職活動は「大学四年生が行うもの」と考えていたため、友人が夏のインターンの選考へ応募している姿



を見て大変慌てたものです。就職活動の指針も決まっておらず、とりあえず知っている企業のインターンへ応募しました。

出版業界に興味があったわたしは、本の卸業者である日本出版販売株式会社（以後、日販）のインターンに参加しました。日販はブックホテルである箱根本箱や、六本木にある文喫を作った会社です。消費者としてのわたしは「読書体験をより良いものにしてくれる会社」だと思い、インターンに参加しました。しかし実際には、業界の実情をよりリアルな数字で提示されたり、社員の方から様々な部署のお話をうかがったりしました。「華やかで楽しそう」という気持ちだけでは飛び込んではいけない世界だとわかりましたし、この体験を通して、わたしの抱いている企業へのイメージは一面にすぎず、選考前にインターンに参加し企業への理解を深める必要があると感じました。

夏は準備不足だったため、一社のみエントリーでしたが、冬には六社のインターンに参加しました。企業について知ることができるのはもちろん、社員の方の前で

グループワークを行うため、他の就職活動生の様子を知れたり、就職活動の予行練習になったりもするのでよい経験となりました。インターンは選考がない企業も多いのでたくさん参加しても損はないと思います。

選考が始まってからは多忙な日々でした。三月の末は、一次選考や履歴書の提出があり一番予定が詰まる時期です。ほぼ毎日のように就職活動をし、日によっては説明会や面接で、一日に三社はしごしたこともありました。

忙しさはあったものの、インターンで見聞きしたこと、学生時代に頑張ってきたことがあったので、三月に特別に何かすることはありませんでした。就職活動本番は、勉強でいう試験のようなもので、それまでに積み重ねてきたことを形にする場です。自分が就職活動に向けて準備ができていてという自信があったからか、緊張せずに臨めました。そうして受けた会社からはすべて内定をいただくことができました。逆に、たいして研究もせずなんとなく選考を受けた会社は全部落ちました。

このような経験から学んだの

は、就職活動を成功させるには自分のしてきたことに自信をもち、自信をもてるだけの十分な準備が必要だということです。就職活動に限らず、目標を達成するためには、最終的に自分を信じるのが大切です。過去の自分が今の自分のためにしてきたことを振り返ってみるとよいでしょう。

「就職活動体験記（公務員）」

星川兎太郎

平成最後の日、私はフリーターでした。

二〇一四年に日本文学科を卒業後、旅行会社で社会人生活をスタートさせました。旅好きの趣味を活かせる環境と、社員の仲の良さに魅力を感じ、がむしゃらに営業する毎日でした。三年が過ぎた頃、周りの転職ブームに乗ってキャリアアップを考え、シンクタンクに転職します。そんな私、今は市役所の正職員です。

なぜ、公務員を目指したのか。率直に、納得のいく働き方が出来

る環境と経済的な安定を求めたからです。民間二社を経験し、営利追及の組織に身を置く難しさを感じていました。仲は良くても周りは好敵手。取引先と自社との駆け引きなど、楽しくも悩みは様々です。そんな悩みを抱える中で公務員の方と仕事をする機会に恵まれ、公務員こそ自分らしく働けると感じたことがきっかけでした。私が目指したのは役所で働く地方公務員。国家レベルではなく、身近な地域の発展に貢献したいと考えたからです。

いざ、「公務員になりたい」と調べてみて驚愕しました。受験科目はなんと一三科目。政治、経済、法律、数学、英語など苦手科目ばかりです。諦めの気持ちが膨らみますが、役所勤めを夢見て、予備校の説明会に参加しました。そして、ここでの発見が支えとなり、今の自分があると思います。その発見とは、情報の大切さを学んだことです。受験生の多くは学習期間が約一年程度、筆記試験の合格基準は平均七割前後です。効率の良い学習が重要で、得意科目で高得点を獲得、苦手科目は割り切る勇気を持ってたことで気持ちが楽に

なりました。日本文の強みは文章の理解度が高いことで、中高生時代に苦手だった理系科目も今向き合うと自然と興味が湧きました。こうして私は会社を辞めてフリーターとなり、新元号を迎えたのです。

履歴書に書いた「中学・高校教諭一種免許状(国語)」がどれほど影響したかはわかりませんが、私は今、市役所の出向機関である教育委員会に籍を置き、補助金交付や学籍管理と日々戦っています。「お役所仕事」と呼ばれる印象もまだまだ残りますが、多様性が求められつつある役所で、地域貢献の一助となることに楽しみと誇りを感じて社会人生活を送っています。

「教員になるまで」

杉山真里亜

自己紹介の代わりに少しだけ、私が教員を志すようになった理由からお話しさせて下さい。

「教員になりたい」と思うよう

になったのは、月並みですが、高校三年の時に出会った恩師に憧れたからです。「学ぶ」のは、受験勉強や就職の為ではなく人生を豊かにする為に、知らないことより知っていることが多い方がきっと楽しい」というのが口癖の先生でした。恩師との出会い以降、新たな知識や教養が自分の中で増えて日常に活かされた時、「学ぶ」ことの喜びと楽しさを実感しました。「学ぶ」ことの意義は人それぞれですが、私自身今でも答えを模索しています。同じようにその楽しさを、子どもたちと一緒に考えられるような教師になりたいという志が自分の中に生まれました。この、人生に新たな選択肢や道が拓ける、という経験が十八歳の私にはとても衝撃的だったのです。

次に、反面教師にして頂きたい教員採用試験の対策等についてお話しします。

教員志望にも関わらず、恥ずかしながらその取りかかりは遅い方だったと思います。まずは三年次の春休み、日文塾という日本文学の学生を中心に教員を志す団体と出会いました。実際に採用試験を受けた方や四年生の先輩方が来

てくださり、面接練習や試験当日の雰囲気など様々なことを教えて下さいました。そこから徐々に一次試験への焦りが生まれ、四月頃からやっとな猛勉強を始めました。今振り返れば順序が逆だったとわかりますが、七月の一次合格後は、二次に向けた面接や模擬授業対策が既にできていたため、かえって自信を持って臨めたように思います。

そして、是非お勧めしたいのは、私学協会への登録です。都道府県によって登録方法が異なるので余裕をもって準備して下さい。実際に登録名簿をご覧になった私立学校から直接お電話を頂き、とある私学の採用試験を受験する機会へとつながりました。

こうして、多くの先生方や先輩方の支えのお陰で教員になることができました。「一緒に頑張れる仲間」への感謝を忘れず、「なぜ教員になるのか」を問い続け、勇氣と知識を持って皆さんの思い描く夢を叶えて下さい。拙い文章で大変恐縮ですが、将来教員を目指す皆さんの一助になれば幸いです。



夏期集中講義報告 (日本文学特講A)

二C 浄野 瑠奈

今年の日本文学特講Aは、佐倉由泰さんがいらっしやって授業をしてくださった。テーマは、日本文学と東北についてだった。平安時代から江戸時代にかけての東北(陸奥・出羽)にかかわる文学作品の記述を読み解き、文学、文化、社会にかかわる多様な問題を見出す中で、それぞれの表現の特質とともに、そこに現れる世界観、人間観、社会認識のあり方を明らかにしていった。主に四つの観点に注目した。陸奥・出羽と歌枕、戦場としての陸奥・出羽、陸奥・出羽の豊かさの表象、東北の文学である。

まず、陸奥・出羽と歌枕では、未開の地であった東北が、和歌に詠まれる名所によってイメージが定着し、遠さと近さの不思議な感覚のずれを生み出した。東北を切り開いていったのは、能因、西行などの数寄者で、古い知識を重ん

じつつ、新たな世界に踏み込んでいった。近代における文学作品は、獨創性が重視されるが、古典文学作品は、重層性を重視していた一面を忘れてはならないことに気づいた。

次に、戦場としての陸奥・出羽では、前九年合戦をはじめとする戦いから、戦場と化した陸奥の国を見ていった。真ん中に華があると考える中華思想から、日本の中に東夷を作り上げた。東夷は、都と生活が違う人として、制圧される対象となった。そんな中、奥州藤原氏は、東北の持つイメージを特殊な辺土から、普遍的の仏国土にしようとした。『義経記』などを読み解いてく中で、世界遺産にも登録された平泉の価値の重要性を改めて理解した。

さらに、陸奥・出羽の豊かさの表象では、金、馬、鷹の羽、アザラシの皮など多くの資源を持つ東北だからこそ豊かなイメージが定着した。豊かだから人が多いと考

はなく、境界として権力を持つていった。

最後に、東北の文学では、東北は、空間的な境界ではなく、人との接点であるという側面から見ていった。国学者でもあり、歌人でもある菅江真澄は、東北を異文化として捉えず、対等なものとして考えた。東北の向こう側には、見えてない世界があり、その先もわからないため、表面的に見えていないところを考える重要性は、現代にも通じると思った。そして、民族共生にも繋がるであろう。

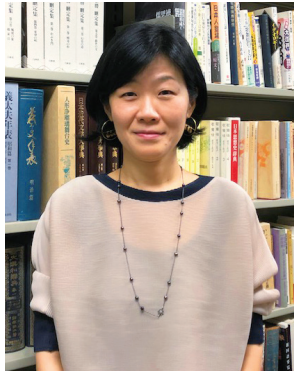
陸奥を代表とする東北は、文学を読み解くと、歴史において、境界という大切な役割を担っていたことがわかった。東北という名の境界は、時として、未知の部分を想像することにより、過剰性を伴い、異界のような印象を与えることもあった。また、両属性を持ち、人と人、国と国を繋いでいた。しかし、両者の利害の対立により争いの場ともなる。加えて、エキゾチックな奥深さもあり、全ての始まりの原郷のようだった。実際の距離は遠いけれど文学の中、人々の心の中では近い、そんなイメージの東北は、古くから親しまれて

いた。文学作品における今までの東北の立ち位置を知ること、今後境界とされるものとの付き合い方を考えていくことが出来ると思う。境界を終わりと考えず、見えていない世界があると認識し、その先になにかあるのかを常に考えることは何事においても重要だと学んだ。東北をさらに越えて、北海道の持つアイヌ文化や他国との関係も今後考えていきたい。



研究室探訪

韓京子先生編



*何を専攻して研究なさっているのですか？

専攻は日本近世文学のうちの演劇です。今研究しているのは、近松門左衛門の浄瑠璃における海外の問題と、植民地期の満州や朝鮮における文楽公演の研究、そして近代歌舞伎『朝鮮屏風』の研究です。
*その分野を専攻なさったきっかけや理由はなんですか？

元々、化学や数学など理系の科目のほうが好きで、大学の学部も

化学科でした。ですが、韓国の小学校で日本語を教える機会があり、日本語に関連する資格があったほうがいいと思い大学院に行ったのが日本文学研究とながったきっかけです。大学院で何を専攻しようかと考えていたときに、たまたま日本の演劇は死を扱っているんだという雑誌記事を見ました。気になって調べてみたところ、

近松門左衛門の心中物というジャンルがあることを知り、なぜ心中でこんなに作品が書けるのか、なぜこんなに死に注目するのかに興味を持ちました。全ての作品で死に方や死ぬ前の考え方が違ったりすること、死んだ後の姿を綺麗にするという意識など、韓国も含め他の国にはない心中物というジャンルに興味を持ち、韓国の修士論文を近松の心中物で書きました。
*韓国の大学院で日本文学の研究をなさるのは大変ではなかったですか？

韓国にも日本関連の研究者自体はとても多く、ほとんどの大学に

日本関連の学料があります。ですが、韓国では特に源氏物語や近代文学の研究者が多く、中世や近世の研究者は少ないので、なんで浄瑠璃？と言われることはありません。浄瑠璃の映像もなくて、教えてくれる人もいなかったからほぼ独学でした。

*先ほど韓国で日本語を教えたとおっしゃっていましたが、先生自身はいつから日本語を話されていたのですか？

両親とともに韓国人ですが、実は小学校六年生までは日本で生活していました。韓国語の読み書きはできましたが、韓国語を話す生活になったのは中学校一年生からです。
*人形浄瑠璃の作品の中で、先生が個人的に惹かれた作品、衝撃だった作品はありますか？

初めて読んだということもあり、『曾根崎心中』かな。残酷でもあり、なんでそんな作品ができるのかとすごく思ったので……。

ほかには『国性爺合戦』かな。まったく全然違うジャンルで、読めば読むほど味が出てくる作品ですね。

*浄瑠璃のなかで一番好きなキャラクターを教えてください

特にこの人が好きっていう人はいないですね。みんな死に急いじゃうし(笑)

*では、嫌いなキャラクターは……。それはやっぱり心中天網島の紙屋治兵衛(おさんという妻がいながら遊女の小春と心中する男…編集部注)ですね。おさんのようにして私じやだめなのという感じが可哀想すぎて。

*大学で先生の講義を受けるまでは、浄瑠璃という言葉しか知らなかったです。

すごくもったいない。高校の文学史の授業では、重要で読んで欲しい作品名を出してくれているんだけど、伝える側も高校生に面白さをうまく伝えられないんだと思います。面白い要素たくさんあるのに……。文学ってやっぱり歴史だから、韓国で教えていた時もまず歴史から叩き込んでいたたね。時代によって出てくるジャンルも作った人も読む人も違うから、歴史さえわかれば文学史は簡単なんだよと話してました。ただ学生にとっては作品名を覚えるのが大変だから、各時代の象徴的な作品だけを扱うことになってしまいました。作品名だけを覚える意

味なんかないんですね。ただ半期だとジャンルも作品も増える近世文学は時間切れでした。近松の作品もほとんど触れられなかったな。

***初めて読むならやはり『曾根崎心中』ですか？**

そうですね。近松自身も自分の中で最高傑作だと思っているみたいですし。他の作品より短いんだけどよくできていて影響も大きいですね。

***大学では高校までの古典と全然違いますね。**

高校までは文法重視で内容の理解が追いつかないことも多くて……。

韓国での授業ではほとんど文法は扱いませんでしたね。文法の面白いところもあるんだけど、それをしていると内容を見なくなっちゃうから。私は日本の文学作品をできるだけたくさん知ってもらいたかったので、翻訳がないテキストを韓国語訳しないといけなくて、それが大変でした。

***どうして日本の大学で教えることになったのですか？**

もともと日本には休みごとに研究資料を集めて来ていましたが、それでも手元に資料が足りなかったんです。韓国の図書館には使え

る資料はないし、ほかの先生の私物の資料はあるけど使えなかった。

ので。あと、日本に修士と博士の課程で八年間留学していたのにその研究を全く活かす機会がないし、浄瑠璃の研究を発表しても他に研究する人がいないから議論もできない。これでいいのかと考えました。

このまま韓国にいても、楽にやっつけていけるだろうけど、これからの人生を考えてそれでいいのかと。ぼーっと生きていたでしょう。もともと自分の勉強したことを活かしたいと思えました。ただ日本で韓国の人が日本文学を教える、ということに不安がありましたね。

***研究室ではどんなことをしていますか？**

ここでは主に授業の準備やリアクションペーパーの検討をしています。***授業で大事にしていることはなんでしょう？**

様々な学科の人が講義に参加しているので理解度をリアクションペーパーで確認しています。講義を通じて、点としての知識が線として繋がり立体的なものとなつて、これまで持っていた認識が変わると嬉しいなと思います。

***自宅が火事になったときに一つ**

だけ持ち出すとしたら何にしますか？

韓国の家なら飼い猫です。猫の譲渡サイトでなかなか貰い手の見つからなかった猫を引き取りました。スカイプで話しかけてもツンとしていますがそんなところも可愛いですね。日本の自宅だったらいつも持ち歩いているパスポートを持ち出します。無くなったら困りますからね。

***韓国と日本の大学生の違いはありますか？**

日本の学生はおとなしいです。教室の温度についての不満もその場で言わずにリアクションペーパーに書いてきます(笑)。韓国の子はしつかり主張しますね。韓国は相対評価なので良い成績を取るために本当に必死です。競争が激しくて、試験のために授業を録音する人もいて、休んだり私語をしたりなんかはありえないくらいです。就職のためにより良い成績を取らないといけないので、最高評価を取るために単位が取れても再履修することもあります。韓国

の留学生の中には日本の学生を見て、うらやましく思っている人もいました。また、韓国の学生は先

生との距離が近く、すごく話かけられます。

***最後に、学生へ向けてメッセージをお願いします。**

日本文学の魅力は日本の学生はあまり認識していないのかなと思います。日本文学は面白くて多様で想像力豊かなところが魅力の素晴らしい文学です。中国や朝鮮などの海外の影響をたくさん受けた文学ではあるものの独自の面がたくさんある文学だと思っています。私が日本の演劇を好きなのは、心中物だけでなく時代物も人が死ぬことに焦点を当ててその人の人生を見つめ語り演じ続けているという点に人としての優しさが込められているという気がするからです。そのような日本の文学の魅力は学生の皆さんにもっと知ってほしいです。それから、最近は何かがどんどん減っています。日本文学の面白さをもっと発掘しなさいいけない人たちのでもっと関心をもつてほしいですね。そして、日本文学から分かるように、日本人は優しい心はずっと持ち続けてきた人だということを感じてほしいという気がします。

院生部会報告

二〇一九年度日大院生部会代表
博士後期課程二年 内村 文紀

院生部会の代替わりは毎年五月に行われる。今年度は博士後期課程に新入生がいなかったため、聞くところによると日氏以来、約一〇年ぶりの代表職二期目と相成った。隠居叶わず残念、無念、嗚呼、浄土宗は法然である。この報告も二度目であり、前回同様に「修士論文の中間報告会」を記事にしては芸がなく、定番判子ネタの『緑岡詞林』を出してもつまらなく、「日本文学会春季大会」には別記事がある、兎角に人の世は云々――。

まあ／＼少しばかりは触れようか。今年度の修論中間報告会では、金波銀波の波を越え、海原遠き船の旅、を完遂すべく六名が航路を示した。門司港に着いたBANANAのような熟れた修士論文を期待したい。「春季大会」では、いずれも博士前期課程の佐々木啓丞、大島瑞月、新田杏奈の三名（敬称略・発表順）が研究発表を行っ

た。『緑岡詞林』は近年、論文の投稿が少ないため、後援の方々より叱咤激励を受けている。院生諸賢を中心に奮起を望む。

それでは二期目の人間にしか書けないことを記そう。ハードルは下げたおこう。単に前回の報告提出後に降って湧いた「引越しの話」なのだから。すったもんだを飛ばしつづ、飛ばされぬようざつくり述べれば、前年度の弥生は一五日をもつて、院生研究室は一七号館へと移転させられたした。ところが同時期に、日本文主権の国際シンポジウム（濃厚）も控えていたものだから、さあ大変。チェスポクシングもかくやあらむ、しづ心無く髪の毛の散るらむ、といったてんたわんやのなか、作業は行われた。かつての郭公が住み着いているかのような森閑さのあった、我らが庵と比して新院研は、他専攻と相部屋ということもあり、飛ぶ鳥を落とすには未だ至らぬであろうが、活気はまあ／＼それなりで。問題の卵がこちらこちらに転がってはいるものの、結構毛だらけ猫灰だらけ、といえようかな。

今年度の学生の活躍

【二〇一九年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇学部最優秀賞 佐久間翔子（四年）

◇学部優秀賞 長谷川真那（三年）

◇学部奨励賞 伊賀彩夏（四年）、青野莉奈（三年）、柏倉光来（二年）

【全国大学国語国文学会】

◇研究発表奨励賞 岡島由佳（博士後期課程三年）

【MOS（マイクロソフトオフィススペシャリスト）世界学生大会2019 日本代表選考】

◇大学・短期大学部門「ワード」部門 三位入賞 北島朱莉（四年）

【明治神宮春の大祭奉祝 第140回明治記念総合短歌大会（明治神宮献詠会 明治記念総合歌会主催）】

◇一般の部 佳作 黄郁婷（博士後期課程二年）

【第13回全日本学生・ジュニア短歌大会（日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育委員会後援）】

◇高校・大学生の部 日本歌人ク

ラブ賞 井藤智也（三年）

ああ空も雲も流れる今ぼくは地を蹴りちきゅうをまわっています

◇同三枝昂之賞 加藤美帆（三年）

すべて嘘のような祖父の死いつまでも青い四月の空を見ている

◇同三原由起子賞 永橋光（四年）

裏移り、インクの滲み、涙の跡。こんな恋文出せそうもない

◇同秀作賞 薄井映理菜（三年）

窓の外ビルから田圃に変わったらあと一駅で祖母の家です

竹田菜純（二年）

友の声聞きつつ目先の温玉をいつ崩そうか考えている

◇同優良賞 堀口元貴（三年）、

◇同奨励賞 頼まりな（四年）

【第34回国民文化祭・にいがた2019「詩（ことば）フェスティバル」花火と良寛の地で】（新潟県実行委員会の短歌コンクール）

◇特選 竹田菜純（二年）

闇に散る花火一粒だけでいい瓶に閉じ籠め眺めていた

◇入選 堀口元貴（三年）、

年)

【第14回「青山歌壇」(青山学院)】

◇最優秀賞 松本のぞみ(一年)

はじめての能動的な恋なのでLの卵を買ったりもする

◇理事長賞 石井あづみ(二年)

◇大学長賞 小舟萩(二年)

◇優秀賞 竹田菜純(二年)

《二〇一八年度》(学年は当時)

【「正岡子規平成文学賞コンクール」(正岡子規平成文学賞コンクール実行委員会主催) 短歌部門】

◇入賞 鈴木那奈(二年)、平本綾香(三年)

【第24回「前田純孝賞」学生短歌コンクール(兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞主催)】

◇新温泉町長賞 薄井映理菜(二年)

◇神戸新聞社賞 秋葉翔太(二年)

◇佳作 小野和実(三年)、頼まりな(三年)、黄郁婷(博士後期課程一年)

【第8回「荒城の月短歌大会」(竹田市主催、角川文化振興財団講演)】

◇自由題一般の部 佳作 井藤智也(二年)

【「若山牧水青春短歌大賞(延岡市)】

◇一般の部 佳作 黄郁婷(博士後期課程一年)

日本文学科関係書籍

*二〇一七年一月から二〇一九年

一〇月までに出版された日本文学

科専任教員、日本文学科・大学院

日本文学・日本語専攻卒業生が出

版した日本語・日本文学・日本語

教育に関する図書を紹介します。

未掲載の書籍については情報をお

寄せください。

《二〇一七年》◆杉山和也『南方

熊楠と説話学』(ブックレット書

物をひらく) (平凡社、一〇月) ◆

宮川葉子『楽只堂年録 第六』(史

料纂集) (八木書店古書出版部、

二月)

《二〇一八年》◆杉山和也他『熊

楠と猫』(共和国、四月) ◆佐藤

泉『一九五〇年代、批評の政治学』

(中公叢書) (中央公論新社、三月)

◆廣木一人『連歌という文芸とそ

の周辺―連歌・俳諧・和歌論―(新

典社、四月) ◆佐伯真一『武国』

日本 自国意識とその罫』(平凡社

新書) (平凡社、一〇月) ◆森幸

穂他『プレゼンテーションの基本

協働学習で学ぶスピーチ型にはま

るな、異なれ!』(凡人社、一〇月)

◆山本啓介『歌枕の聖地 和歌の

浦と玉津島』(ブックレット書物

をひらく) (平凡社、一月) ◆篠

原進監修・岡島由佳翻刻等『新選

百物語』(白澤社、二月) ◆小

松靖彦編集人『戦争と萬葉集』創

刊号(戦争と萬葉集研究会、二二

月)

《二〇一九年》◆宮川葉子『楽只

堂年録 第七』(史料纂集) (八木

書店古書出版部、二月) ◆大屋多

詠子『馬琴と演劇』(花鳥社、三月)

◆韓京子『近松時代浄瑠璃の世

界』(ぺりかん社、三月) ◆片山

宏行他『薄田泣菫読本』(翰林書房、

三月) ◆秋元美晴他『日本語教育

よくわかる語彙』(アルク、六月)

◆大上正美『世説新語』で読む

竹林の七賢』(漢文ライブラリー)

(朝倉書店、六月) ◆掛野剛史他

『水上勉の時代』(田畑書店、六月)

◆山本啓介他『続古今和歌集』(和

歌文学大系) (明治書院、七月)

◆秋元美晴監修『日本語を学ぶ外

国人のためのこれで覚える! 漢字

字典 3500』(ナツメ社、七月) ◆

矢嶋泉他『現代語訳藤氏家伝』(講

談社学術文庫) (講談社、八月)

日本文学科同窓会から

一九七七年度卒 大塚 修平

同窓会では年に一度、同窓会報

『ひいふいみい』を発行している。

会報には、毎回大勢の卒業生に

登場していただいているが、人気

の特集記事として「えっ、あの

も日文? そうか、同窓生なんだ

!!」がある。

同窓生は様々な分野で活躍をし

ており、毎回テーマを定めて特集

を組んでいる。そんな中、会報第

十号の「書き手扁」に登場してい

ただいたのが、作詞家の桑原永江

さん(八五卒)である。

毎年九月二三日には青山キャン

パスで大学同窓祭が行われてお

り、日文同窓会では同窓祭に訪れ

た卒業生の皆さんのたまり場とし

て「日文の部屋」を設置してい

る。二〇一七年、この「日文の部

屋」に桑原さんがひょっこり姿を

現した。挨拶もそこそこに彼は手

にしていた雑誌をうれしそうに見

せてくれた。それは桑原さんの作

品が載ったNHKの「みんなのう

た(一〇・一一月号)」であった。

桑原さんと初めて会ったのは二〇一三年の秋、『ひいふいみい』に登場していたためインタビュを行った時である。歯切りの良い話しぶり。気遣いが感じられ、さわやかな好青年であった。

インタビュで特に印象深かったのは、彼が在学中から童謡に関わっていたことである。もともとはコピーライターに憧れて日本文学志望したとのこと。入学後たまたま誘われて入ったのは「童謡研究会」。この会では、保育園などに向き自分たちの作品を歌わせてもらうこともあったという。

大学卒業後、広告制作会社に入社、コピーライターになるが、二七歳でフリーに。作品が「お母さんといっしょ」に採用されたのを契機として、作詞活動に軸足を移り、以後作詞活動にまい進しているという。

彼の名をネットで検索すると童謡に限らず、アニメ、戦隊物、ポップスなど数多くの作品を世に送り出している事がわかる。

数年前から孫と暮らすことになり、幼児番組を見る機会が増えた。「いないいないばあ」「お父さんといっしょ」「お母さんといっしょ」

といった具合である。番組の歌の作詞者に「桑原永江」という名が何度か見えた。同窓生と言うだけで強い親近感を覚え、応援の気持ちを持ちながら孫と一緒に番組を楽しんでいる。

多くの同窓生が様々な方面で活躍している。今回は、作詞家「桑原永江さん」を紹介させていただいた。同窓生である彼の活躍を皆さんに知っていただきたく、そして彼を応援していただければとの思いである。



二〇一九年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究 (二)

萬葉・書物・文学交流の諸問題

小松 靖彦

中古文学研究 (二)

『更級日記』を読む

土方 洋一

中古文学演習 (二)

平安文学の注釈のあり方について

高田 祐彦

中世文学研究 (一)

『六代御前物語』の輪読

佐伯 眞一

中世文学演習 (二)

『道堅自歌合』の研究および注釈の作成

山本 啓介

近世文学演習 (一)

黄表紙『荒山水天狗鼻祖』を読む
む／読本『夢想兵衛胡蝶物語』を読む

大屋多詠子

近世文学研究 (二)

ベストセラーに代表される流行や文化状況

篠原 進

近代文学研究 (二)

近現代学会発表論文の完成

日置 俊次

近代文学演習 (三)

泉鏡花作品の読解・考察

吉田 昌志

近代文学研究 (三)

昭和期の作品からさぐる近現代文学の文化・思想

佐藤 泉

劇文学研究

「劇文学」の世界を多角的に知る

根岸 理子

日本語学研究 (一)

コーパス言語学の理論と方法

近藤 泰弘

日本語学演習 (二)

語用論研究法

澤田 淳

日本語教育学演習

日本語における語彙と漢語接辞の研究と指導について

山下 喜代

中国古典学研究

中国古典詩歌精読

山崎 藍

〈学部〉

文学研究法

文学研究の基本的な手続きや方法を学ぶ

韓 京子

山本 啓介

土方 洋一

高田 祐彦

日本文学史

上代・中古文学史

高田 祐彦

中世文学史

江戸時代の文学史

山本 啓介

近代文学史

大屋多詠子

佐藤 泉

古典文学概論

江戸文学を入り口に古典文学について考える

大屋多詠子

近代文学概論

短編小説の世界

日置 俊次

漢文学概論

中国文学が日本文学に与えた影響
について

山崎 藍

日本語日本文学情報処理法

コンピュータを研究で有効活用す
るためのデータ整理と処理

岡田 一祐

日本語学概論

日本語の仕組みを学習する

近藤 泰弘

日本語史

日本語の歴史について考察する

澤田 淳

表象文化研究概論

日本近代文学と〈科学〉

木村 政樹

日本文学入門

海外の視点から日本の言語・文学・
文化を考察する

小松 靖彦

文学交流入門

日本文学を海外との交流の視点か
ら考察する

小松 靖彦

日本文学入門

留学生のための日本文学入門

佐伯 眞一

日本文学演習

書物・萬葉・交流の研究

小松 靖彦

『古事記』と『日本書紀』の対比

STOILOVA, Victoria Iosifova

『源氏物語』賢木巻精読

高田 祐彦

『堤中納言物語』精読

土方 洋一

枕草子から古典文学研究に必要な
知識・方法論を学ぶ

津島 知明

『新古今和歌集』研究

山本 啓介

『平家物語』の輪読

佐伯 眞一

『今昔物語集』を中心に日本の中
世期における説話を読解

目黒 将史

人形浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』精
読

韓 京子

滑稽本『劇場訓蒙図彙』を読む

大屋多詠子

『懐硯』を読む

水谷 隆之

現代短歌の研究と実作

日置 俊次

大正から昭和初期、戦後の評論

佐藤 泉

大正期の短篇小説から「文学」を
研究的に読む方法を学ぶ

掛野 剛史

芥川龍之介作品の精読

木村 政樹

「劇文学」の世界を多角的に知る

根岸 理子

翻訳演習

日本古典文学が外国語に翻訳され
ることの意味、日本語と日本文
学・文化の多様性について

常田 槇子

中国古典文学演習

中国古典詩歌（楽府、六朝詩、唐
詩、宋詩、宋詞など）精読

山崎 藍

中国文学・思想演習

漢文訓読の基礎的な知識を修得

加納留美子

文学交流演習

インドに関わる代表的な日中の漢
文体作品の精読

藏中しのぶ

日本語学演習

語用論の観点から日本語を分析す
る

澤田 淳

大正時代から現在に至るまでの
「ことばの世代差・変化・ゆれ・
誤り」についての検討

中川 秀太

日本語の話しことばと打ちことば
の考察

東泉 裕子

日本語学研究の方法論全般につい
て

近藤 泰弘

方言や社会言語学に関する論文を
読む、調査する

白岩 広行

日本語・日本語教育演習

「標準語ではない日本語」を対象に
日本語の多様性について考える

白岩 広行

日本文学講読

『狭衣物語』を読む―飛鳥井女君
との恋物語を中心に

吉野 瑞恵

中世における説話、物語を読み解く

目黒 将史

『新小説』に掲載された文学作品
を読む

植田 理子

『記』『紀』『萬葉』を読み解く

松田 浩

近松門左衛門の「心中物」を読む

韓 京子

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文学
への理解を深める

山崎 藍

日本語学講読

日本語の歴史の変遷の様相を、語
彙・文法の面から考える

鴻野 知暁

書道の歴史と実技

楷書と行書の基本的事項と硬筆・
毛筆の基本的技法／日中比較書

道史

柳田さやか

楷書と行書の基本的事項と硬筆・毛筆の基本的技法／日中比較書道史

鈴木 晴彦

日本語教育概論

日本語教育の現状や内容、指導方法について理解を深める

山下 喜代

日本語教授法

外国人に教える「日本語教育」について、基本的な知識・手法を学ぶ

荒卷 朋子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学と関連する対象を扱う卒業論文作成指導

土方 洋一

平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導

高田 祐彦

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

佐伯 眞一

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

片山 宏行

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

卒業論文作成指導

日置 俊次

中国文学に関連する卒業論文作成指導

山崎 藍

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

近藤 泰弘

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育や日本語に関する卒業論文作成指導

山下 喜代

日本語教育演習A
「日本語中級会話クラス」の開設を想定としたグループワーク及び日本語教育研究法の学習と研究レポートの作成

山下 喜代

日本語教育演習B
日本語教育における学習内容の把握、及び授業計画の立案

三原 裕子

日本文学特講

日本古代の身と心／戦争下の身と心

小松 靖彦

源氏物語の時間構造

高田 祐彦

小野小町と在原業平、虚像と実像

土方 洋一

『続千載和歌集』の精読

山本 啓介

能・狂言の描く人々

佐伯 眞一

井原西鶴『男色大鑑』を中心に近世文学を多角的に理解する

染谷 智幸

『桜姫全伝曙草紙』の世界

大屋多詠子

文学作品から近現代の「生」「死」の概念とその効果、変容を考察

佐藤 泉

横光利一研究―短編小説の世界―

日置 俊次

文学交流特講
多言語・多文化化の進む現代の日本語をめぐる「文学交流」

河路 由佳

日本文学とアジア
中国近代の文学と思想を学び、日中関係を考察する

吉田 薫

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ
翻訳過程の政治的・商業的な要素の探究、及び西洋諸国における

近代日本文学の受容

KHEZRNELAT, Gregory Warren

表象文化論

説話・芸術論・物語文学で読む「書・香・画」の世界

松岡 智之

近世文学、主に演劇（人形浄瑠璃・歌舞伎）に描かれた事象を表象の観点から分析

韓 京子

演劇作品と日本文学の関係を考察

今井 克佳

日本文学特講A（集中講義）
平安時代から江戸時代にかけての東北（陸奥、出羽）に関わる文学作品の読解

佐倉 由泰

中国文学・思想特講
唐代の詩人・白居易の作品を学ぶ

高芝 麻子

中国古典文学特講
司馬遷『史記』を通して中国古典の知識を深める

山崎 藍

日本語学特講
電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ

近藤 泰弘

日本語表現の特徴・特色について
考える

澤田 淳
全国諸方言における言語としての
仕組みを理解する

白岩 広行
日本語教育特講

日本語の指導項目である文法・文
型及び語彙について、その指導
内容と方法、教材化について考
える

山下 喜代
日本語教育実習

「短期集中日本語会話クラス」の
開講準備、授業実施、事後評価
活動

山下 喜代
日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語
で書かれた日本文学・文化論を
正確に理解し、英語で発信する
能力を養成

SEN, Raj Lakhi
音声表現法

状況に応じた音声表現を学び、社
会での実践へつなげる

夷石寿賀子
文章表現法

読み手を意識した文章表現・技術
をみがく

加藤 祥

【研究室だより】

*二〇一九年度三月の卒業生は
一・二六名、四月入学生は一四〇
名でした。大学院前期課程三月
修了生は三名、四月入学者は六
名でした。後期課程の修了者は
二名でした。

*二〇一九年度から新たに非常勤
講師として、東泉裕子、柳田さ
やか、吉田薫の諸先生方にご尽
力いただいています。

*二〇一九年度は、小松靖彦教授
が学科主任を務められました。

*二〇一九年度は片山宏行教授が
特別研究期間（本学）のため休
講なさいました。

*二〇一九年度日本文学大会（春
季）・講演会・総会が六月二二
日に青山キャンパス、一四号館
大会議室で開催されました。講
演会については本会報四頁をご
覧下さい。

*二〇一九年度日本文学大会（秋
季）・講演会は台風の影響によ
り、中止となりました。

*副手の田所晴佳さん、高橋みの
りさんが退任され、一月から小
池直さんが、四月から中村花緒
さんが着任されました。

【編集後記】

今年度の会報作成は、例年に倣
い初夏に動き始めました。私は昨
年度会報作成には携わらなかつ
たため不安な点ばかりでしたが、
様々な方のご協力もいただきなが
ら編集後記執筆にまで至ることが
でき、感謝しております。

今年度の会報では、前年に引き
続き多くの一年生が執筆等を引き
受けてくれました。ここまでお読
みいただいた方々は、数多くの読
み応えある記事と巡り会えたこと
と思います。

また、今年は日文委員会の活動
において、新たな試みが多数行わ
れました。ゼミ紹介は、より詳細
な情報が一年生に伝えられるよ
う、資料の見直しが行われまし
た。青山祭での古本市では、多く
の人に本との出会いをお楽しみい
ただけるよう、委員で案を出し合
い、内装やディスプレイにもこだ
わりました。昨年よりもたくさん
の本を、ご来場くださった方にお
届けできたことと思います。
今年度は一年生が数多く委員会
に加入してくれました。今年の経
験を活かし、来年度により良い試
みを行ってくださることを期待を抱
いております。

最後になりましたが、本会報発
行にご協力いただきました方々に
心より御礼申し上げます。執筆を
担当してくださった皆様、取材に
お応えくださいました先生方、そ
の他様々な面で作成に携わって
くださいました皆様、誠にありがと
うございました。次号以降も、よ
りよい会報の作成を目標に努めて
参りたいと思います。

蛭田 桜

編集委員

教員

高田 祐彦 山崎 藍

学部二年生

蛭田 桜 狩野 祐輝

学部一年生

江夏萌々子 坂井 穂香

田口陽香留 笹田明日香

山崎 茉緒

会報 第五十四号

二〇二〇年三月一五日 発行

渋谷区渋谷四一四―二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科学研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (03)33409179-17

FAX (03)33409180-5